

# 日本におけるリトミック移入史

## ——太田司朗の関わりを中心に——

### The Introduction of Eurythmics to Japan : Centered on the Involvement of Shiro Ohta

板野 晴子\*  
Seiko Itano

#### 1. はじめに

幼稚園教育要領の教育の目的には子どもたちの豊かな感性を育てることが謳われている。また、学校教育法第三章第二十三条の五には「音楽，身体による表現，造形に親しむことを通じて，豊かな感性と表現力の芽生えを養うこと<sup>(1)</sup>」と記されている。2009年には文部科学省調査官の高須が「身体を動かす活動を音楽学習そのものことに成功している例としてリトミック等の方法が挙げられる<sup>(2)</sup>」と述べるなど，音楽を介在させ，身体—感性—教育の関係性を重視する教育法として，E. J= ダルクローズ（1865–1950）のリトミックは広く認知されるようになりつつある。

リトミックはスイスの音楽教育家 J= ダルクローズ（以下，J= ダルクローズと記す）が創案した，聴いた音楽を身体表現することにより心と身体の調和を図る教育である。現在，日本においては各都道府県に支部を置くリトミックの研究会が複数存在し，保育士および幼稚園教諭の養成校においてもリトミックの内容が扱われるようになった。

身体運動を伴う音楽学習であるリトミックは，子どもの感性の育成を担うことができるという認識がなされている。近年，小学校，中学校，高等学校の学校教育の音楽授業の内容に，リトミックを活用した報告などがなされるようになってきた。さらに2009年から実施されている教員免許更新制において，教科「音楽」が関わる講習には，その内容にリトミックが取り上げられているものもある。また，民間の教育機関を中心に乳幼児から高齢者，学習者から指導者に至るまで2万人ほどのリトミックの経験者が毎年増加している現状にある。これらのことから近年の音楽教育の場においてはリトミックの需要がますます高まってきているとみることができる。しかしながら，それぞれの研究会，研修会，講習等ではリトミックを活用した音楽指導法，いわゆる実践活動が行われているが，その基礎的研究は多くない。特に J= ダルクローズが創案したリトミックが日本に移入されるに至った歴史についての報告や研究は，十分にはなされているとは言い難い。日本において初めにリトミックの手法に着

---

\* 立正大学社会福祉学部人間福祉学科

キーワード：リトミック，広島，太田司朗

目したのは、「身体」と「感性」の関係性を追求する、歌舞伎や演劇、舞踊などの身体表現を主とした者達であった。リトミックの「聴き取って、自らが感じたことを表現する」という、当時としては斬新な音楽の身体表現法が注目されたのである。

## 2. J= ダルクローズの述べる sensibilité (感性)

J= ダルクローズの論文集<sup>3)</sup>の中にはいくつか sensibilité という語句が出てくる。ここでの sensibilité は感性を指している。J= ダルクローズは、sensibilité (感性, 感受性), sens (感覚), sentiments (感情), sentiments intérieurs (内的感情) とリトミックとの関わりを述べている。リトミックは sensibilité にも着目した教育である。『リズムと音楽と教育』の第7章「学校, 音楽, 喜び」の一部分を紹介する。注目すべき語句<sup>4)</sup>には筆者による数種の下線を次の様に付した。

- ・ sensibilité (感性, 感受性)
- ・ intelligence (知性)
- ・ corps (身体)
- ・ volonté (意志)

学校は、社会生活を準備する。つまり、学校を卒業した子どもたちは、ただ単に社会生活のさまざまな義務を果たせる準備ができていだけでなく、一人ひとりが自分の個性を発揮して、他人の同じような権益を侵害することもなく、実生活において自分の意志を行使することができなければならない。学校では、子どもたちの知性、身体、意志、感受性の教育は同時になされなければならない。この四つの欠くことのできない事項のどれひとつとして、他のものの優遇と引き換えにおろそかにされてはならないのである。／ 実際、もしも知性の育成を抜きにして、もっぱら身体<sup>パーソナリテ</sup>の発達だけに専念すれば、どうなるだろうか。意志をもたない知性は何の役にたつのだろうか。同様に、感性によっていわば制御され、節制され、調和を与えられなければ、知性と意志が一つに結びついて何もできない。／ さて、我が国の学校では、まさに感受性の教育がなおざりにされているように見える。この欠落が、性格の発達に対し、嘆かわしい結果を及ぼしていることも遺憾に思う。奇異に感じることは、この神経衰弱の時代に、拙く制御された感性を源とする際限のない欲望に指針を与えることをなおざりにしていること、一方、経済的成功の観点から、どんな手段を使うかには無頓着に、もっぱら意志の力に頼っている新興国では、乳幼児期からの感受性の発達を求めようとしないこと、さらに、極めて長期にわたる堅固な伝統が、人格的（個性）の発達を阻んでいる国々では、気質を刷新する手段を求めないこと、などである。しかしながら、もっと柔軟な精神、もっと堅固な意志、もっと潤いがあり、排他性の少ない知性、もっと洗練された本能、もっと豊かな人生、美しいものへのもっと完全な、もっと深味のある理解力、を備えた新しい世代を育成することは可能なのである。(中略) もしこの教育が本質的にスポーツ的なら、目的を踏み越し、感受性を欠いた世代をつくり出すだろう。大事なことは、教育が知的な発達と身体的な発達を平行して前進させることであって、リトミックは、この二重の意味で有益な影響をおよぼすものと私は思うのである<sup>5)</sup>。

J= ダルクローズの述べる sensibilité（感性）は、広い意味での「感じとる能力」として、感覚的な諸能力を意味し、intelligence（知性）は、「思考の能力」を意味し、一般的には感性と対比的に用いられるものと考えられる。J= ダルクローズは、教育において、知性、身体、意志、感受性が育成されることの重要性を述べ、これらの育成は「人格的個性の発達」を促すものであるとしている。感じ取ることである「感性」、考えることである「知性」、自発的に考える「意志」、意志によって動く「身体」の調和的発達を目指す教育が、J= ダルクローズのリトミックであると言える。

### 3. これまでのリトミック移入史の概観

これまでのリトミック移入に関する先行研究は、福嶋（2003）<sup>(6)</sup>に詳細が纏められている。我が国のリトミック移入史の初期においては、歌舞伎俳優の二代目市川左团次（1880-1940）と劇作家・演出家である小山内薫（1881-1928）、モダンダンスの創始者である石井漠（1886-1962）、東京オリンピックの演出を手掛けた舞踊家伊藤道朗（1893-1961）らの名が挙げられる。

また、ドレスデン郊外のヘレラウのダルクローズ音楽学校（写真1）でリトミックを見学して帰国した音楽家山田耕筰（1886-1965）、山田からリトミックを紹介され、自らの舞踏教育に採り入れた舞踊家石井漠（1886-1962）、体育教育の分野にリトミックのリズム運動を取り入れた体育教師天野蝶（1891-1979）らの活動が報告されている。彼らはいずれも身体表現の分野におけるリトミックの活用を考えた。

日本への音楽教育としてのリトミック移入に関わる人物として、主に次の3名が挙げられる。ジュネーヴとパリでリトミックを学んだ小林宗作（1893-1963）、先述の天野、ニューヨークで学んだ板野平（1928-2009）である。

小林が関わる移入史については拙稿（2011）<sup>(7)</sup>を参照されたい。小林は2度の渡欧で、リトミック、ボーデー体操、ピアノ、舞踊などを見聞して回り、帰国後はトモエ学園、成城学園、国立音楽大学において、教育活動を始めた。小林が我が国において初めてリトミックを「音楽教育法」として紹介したことは、彼の業績の一つであると認識されている。

天野は体育教育の分野でのリトミック普及を図ったが、リズム運動を内容に含んでいるこ



写真1 ヘレラウのダルクローズ学校  
(Schule Helleraufür Rhythmus,  
Musik und K eperbildung)  
2010.8.19

とや、童謡の歌詞を作詞しており、その作品は「おべんとう」「おはよう」など、幼児教育の現場でも頻繁に使用されている。

また、板野が留学生としてアメリカに渡った経緯は拙稿 (2010)<sup>(8)</sup>に詳しい。

帰国後に日本のリトミックの普及の基礎を築いた3名のそれぞれの業績については、教育実践の検討など若干の報告がなされている。しかし、日本のリトミックの移入に関わった人物はこの3名の他にも存在する。そのような人物の一人、音楽教育家である太田司朗 (1904-1989) についての研究は、多くはなされていない現状にある。

太田は第二次世界大戦前後、広島大学教授として教鞭を執り、音楽教育に携わっていた。広島大学は戦前、戦後において、文理科大学<sup>(9)</sup>として日本の教育界を牽引する役割を担ってきた。リトミック教育の広がりや広島の音楽教育の有り様と、戦後の広島の復興の経緯とも関係がある。リトミック導入の歴史におけるこれまでの太田の役割を明確にすることは、今後の我が国のリトミック教育の在り方を歴史的視点から考察するためにも重要な意味を持つものである。

太田が広島で行われたリトミックの講習に参加していた1923年は、小林が渡欧し、パリのリトミック音楽院 (Ecole de Rythmique de Paris) で学んだ年でもある。太田も小林も当初は小学校訓導として教育の職に就いた。彼らはそれぞれの見地から当時の日本の音楽教育の方法に疑問を抱いていたと思われる。太田や小林が抱いた疑問の回答をリトミックに求め、その結果として日本にリトミックが普及したことは、彼らの業績と言える。

本章では、日本におけるリトミックの黎明期を概観する中で、広島を地を中心に音楽教育に携わっていた太田司朗 (1904-1989) に注目する。太田は国内に留まりながら西洋の音楽教育に関心を示し、明治期から大正、昭和にかけてのリトミック移入に関わった。彼は地方にあって、世界的な視野に立ち、音楽教育メソッドに敏感に関心を持っていた人物である。太田は当時布かれていた学制の下での音楽教育には、身体運動を通して音楽を学ぶ機会が無いことを指摘している。太田の関わりを中心に、日本へのリトミック移入の一端を明らかにしていく。

## 4. 太田司朗の音楽教育

### 4. 1. 太田司朗の教育活動

太田の音楽教育実践に関する先行研究は中山 (1992) による論文<sup>(10)</sup>が存在するのみである。中山は広島における音楽教育を牽引した人物として太田を紹介し、そこに本人からの聞き取り調査で得たエピソードを記している。現在の日本におけるリトミック教育の普及を図った人物である自分の教え子を、アメリカ留学に送り出した恩師としての太田の役割が報告されている。戦後の日本におけるリトミックの普及は、太田の存在なくしては語ることは出来ない。筆者は太田による文献と、関係者からの聞き取り調査等をもとに、太田の活動を調査し、教育理念を探っていく。本プロジェクトの期間である2009年9月から2011年3月までの間に、

太田の家人、縁者、教え子である方々へ面会しての聞き取り調査を行い、電話や書簡の往復による取材の補充を行った。

太田については、エリザベト音楽大学教授、水嶋良雄氏による紹介文が広島県の郷土雑誌に掲載されている。『けんみん文化』の「ひろしま人物誌」<sup>(11)</sup>の一部を紹介する。

熱心な教育者、音楽家、指揮者として昭和を生きた太田司朗（明治三十七～昭和六十四年）は、広島の音楽活動を大きく推進した。その高潔な人柄は今も讃えられている。／広島市阿佐北区に生まれた太田は、広島師範学校（現広島大学学校教育学部）卒業後、同校附属小学校に奉職した。難関の教員検定試験を突破して母校・広島師範学校の教壇に立った。学校での教育の他、学校・自宅の別なく生徒を熱心に指導し、門下生を東京音楽学校（現東京芸大）に数多く合格させた。（中略）誰もが、「太田先生に習ったものの、レッスン料を納めたことはなかった」と、異口同音に語る。音楽は費用のかさむのが現実であるのに、太田は音楽の指導に使命感を感じ、金銭については全く超然とした、高潔の士であった。／原子爆弾で愛児を失い、失意の中にあつた時、太田を援助する申し出がアメリカからあつた。彼は代わりに教え子を米国へ送り、「リトミック」を学ばせた。板野平がその人であるが、板野はその後、国立音大の教授となり、その道の第一人者として活躍する。こうした幼児音楽教育の中心分野は太田の存在があつて初めて、我が国へ導かれた。（中略）四十歳代半ばまで広島大学に勤務したが、東京、大阪以外の地で初めて、広島に音楽大学を設置しようとするゴーセンス神父の卓見に共鳴。その協力者として昭和二十七年、エリザベト音楽大学へ移った。（中略）定年後は比治山女子短大に招かれ、幼児教育科主任教授として活躍。研究紀要『和顔愛護』に数多く執筆し、音楽を通してヒロシマの心を育て続けた（後略）。

文中「ヒロシマ」のカタカナ表記は、多くの意味を含んでいる。広島市の広報課が作成したインターネットのサイトには「片仮名表記のヒロシマは、被爆都市として核兵器廃絶と世界恒久平和の実現をめざす都市であることを意味します<sup>(12)</sup>」と掲載されており、これは平成10年5月に行われた広島市総合計画審議会からの広島市基本構想の答申で整理された「片仮名表記の場合、ヒロシマの世界的な知名度やこれまでの取組<sup>(13)</sup>」という意味も込められたものである。これらのことを鑑みても、広島での太田の教育活動は平和の実現を願うものでもあつた。

太田の家人である太田直子氏によると<sup>(14)</sup>、幼少期から青年期までの記録等は現存しないとのことである。水嶋による記述以外に、音楽教育に関わる以前の太田の詳細を探ることは出来なかつた。先述の先行研究において中山は、太田本人から聞き取り調査を行っている。リトミック黎明期に関わる人物は、明治、大正、昭和初期にかけて活動した者が中心となっているため、これらの聞き取りや証言は非常に貴重なものであつたと言える。さらに太田がリトミックを知った経緯、リトミックとの関わりと教育観を検討するには、畢生の教育活動から探る必要がある。

#### 4. 2. 太田司朗による校歌の作曲

太田は広島県及び近県の学校の校歌を複数作曲している。各学校の設置市町村名、校歌の作詞者名、校歌制定年を列举する。学校沿革記録のまま和暦で表記した。また、校歌制定年度が学校沿革記録に残されていない場合は、学校設置、統合等、校歌が作成されたに近いと思われる年を記した。以下、太田が校歌を作曲した学校である。

##### 〈小学校〉

- ・広島市立中野小学校（広島県広島市）水木俊之作詞（昭和20年校歌制定）
- ・坂町立横浜小学校（広島県安芸郡坂町）泰 忠雄作詞（昭和24年校歌制定）
- ・廿日市立吉和小学校（広島県廿日市）校歌制定委員会作詞（昭和30年校歌制定）
- ・川北小学校（広島県庄原市）柄松 香作詞（昭和30年校歌制定）
- ・庄原市立永末小学校（広島県庄原市）谷口勝利作詞（昭和31年校歌制定）
- ・庄原市立水後小学校（広島県庄原市）三上唯夫作詞（昭和40年制定）
- ・高南小学校（広島県庄原市）高橋白月作詞（昭和24年秋川小から改称）
- ・広島市立落合東小学校（広島県広島市）野地 潤家作詞（昭和54年発表）
- ・広島市立竹屋小学校（広島県広島市）大原 三八雄作詞（校歌制定年不明）
- ・福山市立駅家小学校（広島県福山市）木下夕爾作詞（昭和30年合併、校歌制定年不明）
- ・広島市立皆実小学校（広島県広島市）安田平一作詞（大正9年創立、校歌制定年不明）
- ・岩国市立灘小学校（山口県岩国市）大岡 昇作詞（校歌制定年不明）
- ・呉市立鍋小学校（広島県呉市）清水文雄作詞（平成21年廃校、校歌制定年不明）

##### 〈中学校〉

- ・廿日市立大野中学校（広島県廿日市）山本康夫作詞（昭和22年創設、校歌制定年不明）
- ・大竹町立大竹中学校（広島県大竹市）石本清四郎作詞（昭和23年3月校歌制定）
- ・呉市立警固屋中学校（広島県呉市）末政 昇（昭和24年校歌制定）
- ・尾道市立重井中学校（広島県尾道市）眞川 惇作詞（昭和25年校歌制定）
- ・呉市立広中央中学校（広島県呉市）眞川 惇作詞（昭和26年校歌制定）
- ・広島市立可部中学校（広島県広島市）小川二郎作詞（昭和38年校歌制定）
- ・広島市立戸山中学校（広島県広島市）上野友男作詞（校歌制定年不明）
- ・大竹市立玖波中学校（広島県大竹市）石本清司郎作詞（昭和22年創立、校歌制定年不明）
- ・三次市立三和中学校（広島県三次市）松田芳昭作詞（昭和33年創立、校歌制定年不明）

##### 〈高等学校〉

- ・広島県立宮島工業高等学校（広島県廿日市）大原三八雄作詞（昭和37年設置）

##### 〈短期大学〉

- ・広島文化女子短期大学（広島県広島市）真下三郎作詞（大学歌作成年不明）

校歌はその地域に学ぶ児童、生徒によって歌い継がれるため、人々に強く意識づけられるものである。よって、各学校の建学の精神や教育理念を歌う校歌は、地域ゆかりの作曲家によって作られることが多い。

広島市立皆実小学校の校歌3番には「アトムの試練 のり越えて ひろがるデルタの いらか波 あすの日本の幸きずく みんなの願いの とうとさに 希望みなぎる わが学舎」と歌われている。昭和20年の原爆投下による壊滅的な被害を受けた広島では、焼失した学校も数多く、学校の復興はヒロシマの復興の意味も含んでいる。坂町立横浜小学校の校歌3番にも「平和の民となるために……（後略）」と、広島の復興の思いが込められている。終戦間もない時期、広島の地域の自然、環境、歴史に密着した教育者として作曲を依頼するには、太田が適任であると考えられていたと思われる。

太田は広島県内、また近県へ多くの教え子を教師として輩出しており、学校教育の現場との強い結びつきを持っていた。太田の専門は声楽であり、作曲ではない。にもかかわらず小学校から高等学校に至るまで、太田に校歌の作曲を依頼している公立学校は20校以上にもなる。教育者、演奏者としての太田の音楽教育活動は知られている部分もあるが、上記に挙げた「校歌の作曲者」としての活動は注目すべき事項である。広島を中心とする教育関係者に「学校の心」とも言える校歌の作曲を依頼されうる人物として、太田は音楽知識人としての信頼と尊敬を得ていたことが判る。

#### 4. 3. 広島メサイヤの活動

太田はフランクのオラトリオ「至福」の本邦初演やメンデルスゾーンのオラトリオ「エリア」の訳詩講演をはじめとし、数多くの合唱曲を指揮した。中国地方に合唱連盟が結成されるに当たっては、その初代支部長に推され、併せて全日本合唱連盟理事として合唱音楽の発展に敏腕をふるった。

この他に、広島流川教会を軸として戦後間もなく行った「広島メサイヤ」の活動も挙げられる。太田は戦争の廃墟からいち早く立ち上がった広島女学院の150人の学生たちと共に、市民に向けて「ハレルヤコーラス」を響かせた。FK（現NHK広島放送局）が広島流川教会から中継した放送の原稿が、ガリ版刷りで残されている。その内容の一部を紹介する。

クリスマス特編番組

『クリスマス音楽禱拜』広島市上流川、流川教会より中継

十二月二十四日午後六時三十分

讚美歌 一〇五（略）（アナウンス）

静かに更けゆくクリスマスイーヴのひとゝき（略）

先づ 木村牧師の聖書朗讀から初（マ）まります（略）

原爆の地広島が このたび世界平和のために

大いなる犠牲を被りましたのは

無意義なことに終わるでありませうか (略)

救主キリストの御名によりてアーメン

ハレルヤコーラス (アーメンに引き続いてスタート)

(昭二一, 一一, 二 AK 検閲済)

(かぶせてアナウンス) 四竈牧師の祈祷とハレルヤコーラスを最後に

広島市流川教会より中継いたしました

NHK

一冊の楽譜すらない状況で、1946 (昭和21) 年に歌われたこの「ハレルヤコーラス」が、  
広島の復興の励みの一つとなったのではないだろうか。2007年に行われた広島流川教会の第  
60回クリスマス音楽礼拝のパンフレットには以下の様に記されている。

1947 (昭和22) 年、「原爆の廃墟の中でヒロシマ市民を励ましてほしい」と、音楽家の  
太田司朗が希望したヘンデルの「メサイヤ」の楽譜30冊が、米軍軍用機で岩国基地を  
経てシカゴのリリヤン・コンデット (高校音楽教師) より広島流川教会に贈られてきたの  
です。(中略) 早速、谷本 清牧師と太田司朗は、女学院、市内の教会、合唱団に呼びか  
け、「メサイヤ合唱団」を組織。(中略) 10月12日から太田司朗の指導・指揮のもとで、  
12月の賛美礼拝に向けて第1部の猛練習がスタートしました<sup>(15)</sup>。

ヘンデルの「メサイヤ」はⅢ部から成るオラトリオである。合唱団員はアメリカの高校教  
師から贈られた楽譜を手に、Ⅰ部の練習を始めた。太田は広島流川教会の一信徒として「メ  
サイヤ」に関わったのではなく、広島の復興を願って音楽教育者としての立場から活動をし  
た。太田は将来を担う若者を中心とした合唱団を指導し、音楽の力により多くの人々に感銘  
を与えた。

#### 4. 4. 太田司朗が輩出した教え子

教員検定試験を突破したという太田の優秀さは自他ともに認めるところであった。太田の  
教え子は各地で教鞭をとり、指導者、音楽家として活躍をしている。太田は4000人にも及ぶ  
教え子を育て、多くの人材を音楽教育界に送り出している。高名な指導者に師事するともな  
れば、高額なレッスン料が必要とされるというケースもままあるが、太田の教育はそれよ  
うな慣行を全く離脱したものであり、正規の謝礼すら全く受け取らない指導であった。太田  
によるレッスンは、金銭を一切要求しないからこそ厳しいものであったことを、教え子の永柴  
義昭氏は語っている。

太田の教え子である永柴氏は、若くから太田の指揮する合唱団のメンバーとしても活動を  
共にしていた。日本の少年合唱の草分け的存在である広島少年合唱隊の創設者でもある。広  
島県内の小学校長、広島市私立幼稚園協会理事、広島県小学校音楽教育研究会会長、全日本  
リトミック音楽教育研究会広島支部長などを歴任した彼は、太田の教育活動をいちばん近く  
で記憶している人物と言える。

また、同じく教え子の一人として、永柴氏と共に本研究の為に聞き取り調査にご協力いた



だいた森川明水氏の他に、全国的に名高い作曲家で福岡教育大名誉教授の森脇慶三（1916－1996）、岡山大学名誉教授の難波正（1912－没年不明）、広島県吹奏楽連盟理事長兼中国支部長の増廣卓三（1923－2009）、国立音楽大学名誉教授の板野平以外にも、門下生には枚挙にいとまがなかった。

## 5. 太田司朗とリトミックとの出会い

これまでに見る通り、太田は広島という地域を教育活動の中心においていた。太田がリトミックを初めて知ったのも広島であった。太田がリトミックとの出会いについて記述した文は複数あるが、先行研究において中山は、聞き取りの結果に“広島女学院幼稚園で講習会を行ったのが、2人の助手を連れて東京から来広した小林宗作だった”という内容があったことから、太田がリトミックを知った年に関して矛盾があったことを指摘している。確かに、小林は1923年6月に第1回目のヨーロッパ留学のため渡欧しており、当年に広島での講習会で講師を務めるのは不可能である。

1923年に広島で行われたリトミック講習会が、太田とリトミックとの出会いであったことを、太田は「ヨーロッパ・リトミックの旅」（1974）に記している。

私たち一行35名は（中略）16日間の日程でヨーロッパ各地の音楽大学を歴訪し、ダルクローズ・リトミック音楽教育の実状視察と、意見交換を目的として出発した。（中略）モーレー音楽大学は、ウェストミンスターにあり、ここでは、ロンドン並に近郊から、多くの教育者が集まってくれて、大いに歓迎をしてくれた。1920年にダルクローズに師事したという老婦人教師もいて、私が師範学校を卒業した1923年の夏、私も初めてダルクローズを知った、と告げると非常に喜んで、「おお 同労者よ！」と言って、堅い握手をしてくれた<sup>(16)</sup>。

太田は1974（昭和49）年、日本のリトミック研究者、教育者らと共にヨーロッパ各地のダルクローズ音楽学院を視察に訪れている。その際に現地の音楽教師と、リトミックとの出会いについて話した際のエピソードから、太田が初めてリトミックを知ったのは1923年であることが判る。この文とは別に、「幼稚園の保育とダルクローズのリトミック」（1976）の論文にも以下のように記している。

私がダルクローズのリトミック教育法に出会ったのは1923年、即ち関東大震災の直前であった。盛夏の一日、広島女学院幼稚園のリズム室で初めてこの教育法に接した。私はその瞬間、驚嘆と感激の念を禁ずることが出来なかった<sup>(17)</sup>。

上記の様に、太田の2本の論文には、リトミックとの初めての出会いは1923（大正12）年であることが記されており、講習会が行われた年に関しては疑う余地がない。太田（1976）論文には「当時は小学校令施行規則第9条<sup>(18)</sup>なるものが厳然とあって、教育の範囲も方法も示されていた。したがって学校の教育に於いては、その法令に従うより他はなかった<sup>(19)</sup>」との記述もある。小学校令は、森有礼文部大臣の下、1886（明治19）年に公布され、1941（昭

和16)年に公布された国民学校令によって廃止されるまで50年以上効力を発揮した法令である。太田が広島師範学校を卒業し、小学校訓導の職に就いた1923年はこの小学校令が布かれていた。太田が音楽の授業内でリトミックの教育法を行おうと考えても、規制があったために、学校教育の場では十分な実践を行うことができなかったことがわかる。中山(1992)論文では「1923年」と記された年について、太田の記憶違いである可能性もあるとしているが、やはり講習の開催年は1923年であったとみて良い。この部分を補強するため、筆者は教え子の永柴氏らからの聞き取り調査を行った。その結果、太田が広島に関わったリトミック講習会については、太田がリトミックに出会った1923年以降に、もう1度開催されていたことが判明したのである。

永柴氏が記した全日本リトミック研究会広島支部の講習会の案内状の一文を見ると「私の古い記憶では、当時広島大学教育学部東雲分校(旧広島師範学校)太田司朗教授が、昭和24年ごろ小林宗作先生を広島に招かれ、体育館でダルクローズ・リトミックの指導を受けたのが最初で、板野先生もその指導を受けられた一人でした<sup>(20)</sup>。」とある。永柴氏は筆者が行った聞き取り調査の際に、小林が講師を務めた講習会についての記憶を以下の様に語っている。

「小林宗作先生は二人の女性の先生を助手として連れていらして、自分の本から拍子、リズム、テンポなどを抜粋して教えてくれた。レッスンの時は手だけではなく、身体全体で、と言っていた。このレッスンを受けた時には板野さんも1つ上の学年だったから、受けたはず。私は昭和25年に教員になっているから、それよりも前の話。講師のお願いに関しては、太田先生が東京へ行ったときに小林先生と接触があったのでは……、と思う。場所は師範学校の体育館で。今の東雲町に講堂があって、体育館があった。」<sup>(21)</sup>

永柴氏は、自分自身が教員生活を始めた1950(昭和25)年という人生の節目と照らし合わせて、講習会が開かれたのはその前年の1949(昭和24)年頃であり、受講当時は学生であったことを記憶している。講習会場は当時太田が教授をしていた広島師範学校の体育館である。太田は小林をリトミック講習の講師として広島に招き、永柴氏や板野ら、数人の教え子を受講生として参加させていた。

小林はこの後の1951年頃にも、広島音楽高等学校で開催された、保育士を対象としたリトミック講習会の講師として来広している。比治山短期大学教授の柿本氏によると、当時保育士であった柿本氏の母親がこのリトミック講習会に参加するのに伴われて、小林の講習会に出席している<sup>(22)</sup>。柿本氏はこの講習会で小林のリトミックを体験し、その後国立音楽大学に進学し、小林の下でリトミックを学んだ。

ここまでの調査の結果を照合すると、太田に関わった広島でのリトミック講習は戦前の1回と、戦後間もなくの1回、計2回開催されていたことになる。戦後の数年は日本全体が混迷を極める状況に陥っていたが、音楽教育のリトミックによる広島の復興を目指し、小林を講師として呼んだのが太田であった。太田に関わった東雲の師範学校体育館で行われた講習会が、その後も小林が広島においてリトミックの講習をするきっかけとなったのである。1951

年頃に小林を講師としてリトミック講習会を開いた広島音楽高校は、その後、小林が務めた国立音楽大学との関わりを強く持つようになり、付属の幼稚園、音楽アカデミーではリトミックを重視した音楽教育を行うようになった。

太田が小学校訓導に着任したばかりの1923年に受けたリトミックの講習は、中山の聞き取りによると、太田は従兄弟から「珍しいのがあるけ連れてってやる」と誘われて参加した<sup>(23)</sup>、という。中山論文に「(予備知識は) まったくない。見てびっくりしたんだ。とにかく視唱法とか聴唱法とかいうのがあるのは知ったよ。けど体で受け止めるということは知らなんだ<sup>(24)</sup>」と記されているように、太田はリトミックを初めて知った時の感動をはっきりと記憶しており、関東大震災の直前という年、真夏という季節、場所等、鮮明に記憶されている事柄を証言している。重ねて述べるが、開催年について、論文に複数回記述していることから判断して、太田が1949年頃以前の1923年にリトミックを知っていたという事の信憑性は高い。

1949（昭和24）年頃に開催されたリトミックの講習と太田との関わりは、広島師範学校の教授として、自ら小林に講師を依頼した主催者側の立場となっていた。太田は、より良い音楽教育の発展のために必要なテーマは何であるのかを考え、それは「歌唱指導法」「器楽指導法」「合唱指導法」「作曲法」「指揮法」「教材研究」などではなく、身体運動を活用した「リトミック」である、と結論を出した。太田は東京から小林を講師として広島に招致したのである。中山の聞き取り調査の際には、この2つの講習会の太田の記憶が交錯し、1923年のリトミック講習会の講師が小林である、という回答になったというのが真実ではないかと思われる。

講習が2回開催されているとなると、1923年当時、太田が受けたリトミック講習の講師が誰であったのかという疑問に突き当たる。太田の傍で大正、昭和初期のリトミックの移入の一端を肌で感じていた永柴氏も、1923年の講師については「あくまで憶測でしかないが」と前置きし、「当時……石井漠さんがいらしたでしょ、その方がバレエを身に付けるために、ダルクローズの方法を使っていましたし……<sup>(25)</sup>」と話すに留まった。音楽の専門性から見ても、可能性のある人物は、1913年にダルクローズ学院で行われていたリトミックを見学して帰国した山田と、山田からリトミックを紹介され、彼が持参したダルクローズのリトミック教則本『リズム運動』をテキストにして研究した舞踊家、石井の2名と考えるのが妥当であろう。しかし、石井は1923年に小林にベルリンで会い、そこでリトミックを学ぶことを勧めている。やはり小林が講師であった可能性はない。

日本ではリトミックが舞踊や体操、演劇の表現の可能性を広げる手段として、先に述べた山田、石井、伊藤らによってそれぞれの専門分野での活用がなされ始めていた時期である。太田はそのいずれかのリトミック講習を1923年に見たとも考えられる。太田の論文内には、リトミックの教育法を持ち帰った人物として山田耕筰（1886-1962）の名が挙げられている。次いで舞踊界の石井漠（1886-1962）、伊藤道郎（1893-1961）がこの教育法に着目した事、音感教育では園田清秀（1903-1935）、鈴木鎮一（1898-1998）らの方法が高く評価されるこ

となど<sup>(26)</sup>、当時関心を持って研究や調査を行っていた人名や音楽教育法が紹介され、論じられているが、小林宗作の名は見当たらない。

リトミックの我が国への移入史研究においては、音楽界以外の人物からも数人名を挙げる事が出来る。山田は三菱財閥の岩崎小彌太 (1879 - 1945) から海外留学資金を受け、1910年3月に渡欧し、1913年までベルリン国立音楽大学で作曲を学んだが、日本人の自分が西欧の作曲家には太刀打ちできないと感じ、「ひそかに留学の目的を劇作に切替えた<sup>(27)</sup>」のである。舞踊にも関心を寄せ、アメリカ出身の女流舞踊家イサドラ・ダンカン (1878 - 1927) の舞踊やJ= ダルクローズのリトミックを見聞した。

帰国して数年後、山田の人間関係の複雑さが岩崎男爵の怒りを買って、援助は打ち切られたが、山田からリトミックについて聞いていた者が石井以外にもいた可能性は十分ある。山田の周りには演劇、舞踊、その他芸術家が新しい芸術を追求する者が多く集まっていたからである。小説家の岩野泡鳴 (1873 - 1920)、歌人の与謝野晶子 (1878 - 1942)、社会運動家の平塚雷鳥 (1886 - 1971)、劇作家の小山内薫 (1881 - 1928)、日本舞踊家の若柳登代 (1877 - 1954)、ダンサーの高木徳子 (1891 - 1919)、女優の川上貞奴 (1871 - 1946)、歌劇女優の村上菊尾 (河合磯代, 1893 - ) 等、身体の動きや音楽、感性に関するそれぞれの分野で活躍したメンバーである。

現時点では1923年の講習会の講師が誰であるか確定することは出来なかった。この部分に関しては今後の調査の継続、という課題を残している。しかしながら、小林が渡欧して初めてリトミックを知った年と、太田が広島で初めてリトミックを知った年が、どちらも同年の1923 (大正12) 年であったということは、興味深い事実として特記すべきものである。

太田はJ= ダルクローズの教育法に強く共感したが、広島師範学校附属小学校の授業内では、思うようにリトミックの内容を十分に実践できることはなかった。国が定めた学校教育の中ではこの教育法を実践することが出来ない、と判断した太田であるが、リトミックの実践を断念することはなかった。これについて太田は「(当時の学校教育は) 教育の範囲も方法も示されていた (中略) 私は法令に従いながら、加味できる範囲で実施したのである<sup>(28)</sup>。」と記している (括弧内筆者)。この音楽教育法への太田の熱意は冷めることなく、自宅でリトミックを教え始めた。「私の教育的野望はこの程度では満足することができなかった。よって私は我が家に知人で理解のある家庭の子供を集めて、この教育の実験をしたのである<sup>(29)</sup>。」という記述から判るように、太田は自宅を「実験学校」としてリトミックの教育法の実践をしていたのである。

これまでのリトミック移入史の研究では、我が国においてリトミックを音楽教育として紹介した人物は小林宗作である、という認識がなされてきたが、本人の述べるところによるならば、太田はあくまで「実験」ではあるものの、小林の実践に先行していた可能性もある。

## 6. 太田司朗のリトミック観

### 6. 1. 太田が感じていた日本の音楽教育の課題

当時の音楽教育では単音の唱歌を歌う「唱歌教授法」や、歌や音楽に振付をつけた「表情遊戯」が主となっていた。太田は当時の音感教育、才能教育にも言及しており、常に音楽教育界の動向に目を向けていた。太田は山田が持ち帰ったリトミックが、山田の母校である東京音楽学校（現：東京芸術大学）で受け入れられなかったことを「残念に思っ<sup>(30)</sup>」いた。山田の音楽上の意見、教育観は「無関心と反感、否、むしろアレルギー的的症状で迎えられ、排他的な待遇を受けているのが現状である<sup>(31)</sup>」として、この教育法が教育界ではなく、舞踊界、学校ダンス界に大きな影響を与えたが故に、リトミックがダンスや体育の中の一部の様に誤認されたことを憂いている。また、以下の部分にも注目したい。

従来の音楽教育法に聴唱法と視唱法との二つの教育法があることは周知のことである。即ち、従来の教育は聴覚と視覚、言を変えて言えば耳と目のみを使って行う教育法である。所が、<sup>(ママ)</sup>リトミックは前記の二つの感覚は勿論のこと、それ以外にすべての感覚を使って、身体運動を通して、体（からだ）全体を駆使して音楽を学びとらせようとする教育法である。前者は往々にして教師中心主義、受動的教育に陥り易い教育法であるのに反し、リトミックは体を使っての教育法であるため、能動的、自発活動による教育法で、幼児の遊びそのものが保育になるのである<sup>(32)</sup>。

ここに見られるように、太田は今までなされていた「楽譜に書かれてある決まった教材を歌う」という机上の音楽学習のみでは、音楽の能力どころか、子どもの自発性も育たないと考えていた。決められた事を教えるという教師中心主義から、児童中心主義への太田の気づきがここに示されている。この段階ではデューイの「児童中心主義」をそのまま反映させたものではないであろうが、「従来の教育法では技術の教育が「音楽そのもの」の習得に優先し、（中略）技術に追われ<sup>(33)</sup>」ているという、音楽教育の現場に技術偏重の課題があることを感じていたのである。太田はヨーロッパの音楽教育界にも同様に、技術偏重の風潮があったことにも言及している。

なぜ太田は「歌唱」でも「器楽」でもなく、「身体運動」が音楽教育に必要であると考えたのか。それは、ペスタロッチ研究者、広島高等師範学校教授の長田新（1887-1961）、全人教育を唱えた小原國芳（1887-1977）、広島大学助手の任にあったフレーベル研究者の荘司雅子（1909-1998）等を輩出した広島大学の当時の太田の周囲の環境にもあったのではないかと洞察される。

太田は荘司とは広島流川教会で信仰を共にしていた。広島流川教会の墓地には太田の墓石（写真2）がある。側にはフレーベルの恩物を模したものとして有名な荘司の墓石（写真3）がある。同じ教会に所属していた仲間であり、広島大学の同僚でもあった荘司との関わりがあったことも、太田が西洋の思想、哲学、教育に強い関心を持っていた理由の一つであった



写真2



写真3

かと考えることもできる。

太田は「上野<sup>(34)</sup>で認めないものは初等音楽教育界では無視される<sup>(35)</sup>」と述べているように、音楽教育界を分析しながらも、身体運動を伴った音楽教育「リトミック」こそが、日本の音楽教育に必要な方法であるという見解から、リトミックを「広島<sup>(36)</sup>」で実践、研究しようと考えたのではないと思われる。

19世紀末期の音楽界、特に演奏部門に於ては Virtuoso (技巧主義、名人芸主義) が幅をきかせていた。このことは音楽の専門教育に於ては勿論の事、初等教育の面に於ても多分にその影響を受けていた。これらのことからして、ダルクローズは、そのゆがめられた音楽教育の是正に努力しようと決心をしたものにちがいない。(中略) 教育の見地から見ても、彼の教育の理想は、正しい音楽によって、正しくそれを感受させ、正しい音楽的思考をなすことによって、喜びと感動を与え、またそれを誘発して、調和的な全人格形成にまで到達させようとする偉大なる教育法であったことを私は断言して憚らないのである<sup>(37)</sup>。

リトミックを通じた音楽教育によって、広島の地域の子どもたちの人格形成を成すこと、リトミックの理念を理解する教員を育て、日本の音楽教育の充実を図ること、このことが「高潔の士、太田司朗<sup>(38)</sup>」が目指していたことであつたとみて良い。

## 6. 2. 太田が関わったリトミック留学生の派遣

日本におけるリトミック教育は第2次世界大戦の大敗により一時縮小した。自らも被ばくした広島流川教会の当時の牧師であつた谷本清 (1909-1986) は、アメリカのミッション・ボードの招きを受けて全米で「ノーモア・ヒロシマズ」を訴え、講演をして回つた。その谷本へニューヨーク・ダルクローズスクールのピアノ教師、ユーレイナ・クラークから、広島の若者を留学生としてアメリカへ招致したい、との要請があつた。留学生招致の件は谷本を介して太田の下に持ち込まれたのである。太田はニューヨーク・ダルクローズスクールの校長、シュースター博士からの手紙に答えて、広島師範学校の教え子であり、既に教職に就い

ていた板野をリトミック留学生として推薦した。

板野が帰国後日本においてリトミックを普及していった背景には、太田の存在が大きく関わっている。谷本とユーレイナの出会いという偶然の出会いの上に、太田と谷本が教会を介して知り合いであり、太田が音楽教育を通じて復興に関わっていたこと、既に太田が日本の音楽教育には身体運動を取り入れた音楽教育が必要であるということを考え、リトミックを実践していたこと、などの偶然と必然との関わりが重なったからこそ、リトミック留学生派遣を果たし得たと言える。つまり太田の教育観・リトミック観なくしては広島からアメリカへリトミック留学生を送ることは出来なかったであろう。

### 6. 3. 太田によるリトミック普及

広島師範学校第1期生に向けた太田の寄稿文「蒼空会諸君に寄せて」<sup>(39)</sup>の一部を紹介する。太田が自身の音楽教育を通して蒔いたリトミックの種は、その後に成果を見ることになる。

昭和十八年には文部省直轄学校となり、三原と合併して広島師範学校（男子部）となり、（中略）君らは本科第二学年となった次第である。／その頃、長谷川鉦三氏と私は中古の自転車を購入、三〇分間運動場で練習し、東雲への細い田圃道を初試乗した珍現象もあった。（中略）諸君は（19年）九月に卒業式が挙行された。晴れの卒業式であっても、例年の雰囲気とは異なり、そわそわした中で、これが最後の別れかと、ピアノを弾く手も悲しく、異様な感じが私の胸に湧いた。諸君は、史上空前の変化と苦悩に満ちた青春を過ごした尊い経験の持ち主である。これらの諸経験が、諸君の人生内容を豊富にし、高揚せしめたものと思ひ、厚い敬意を表すものである。

日本の教育を担う若者達を、その時代に送り出す苦悩があったことが綴られている。その後、広島は多くの犠牲を出して終戦を迎えた。「ノーモア・ヒロシマズ」を唱え、広島の復興が日本の復興である、とした谷本と同様に、太田は広島の音楽教育の復興から日本音楽教育の復興、発展に尽力した。永柴氏と森川氏は太田から受けた音楽のレッスンを振り返り、思い出も交えながら以下の様に語った。

**永柴** ソルフェ、リズム反応、リズム運動、即時反応……師範学校なので十分に出来なかったから卒業してからレッスンを受けていた。初見、教会の讃美歌では和声の学習。身体が生き活きとしてくる経験を、実技講習の中にリトミックを入れてやろうとした。

**森川** 私は教育学部、東雲に昭和28年に入って30年に卒業した。2年課程だった。当時は吉田の高校で山を開墾している暮らしで、音楽の「お」の字もない生活であった。東雲に入って、音楽室の前でピアノを弾いている学生の演奏を聴いて感動して、しばらく一時間ぐらい聞いて、理科をやめて音楽をやろうと。感動には勝てなかった。相談した先輩とどうしてもやる、とけんかしたほどだった。

永柴氏は師範学校を卒業後は教師になるという道が決まっていたが、師範学校では生物学を学んでいたため、卒業間近まで音楽教育を学ぶ機会がなかった。そのような全くの「素人」

である者のレッスンを引き受け、卒業後も永く指導の機会を設けては、リトミックについての講義、キーボードハーモニーの指導をした。学校教育では「単音による」音楽指導という制限があったが、永柴氏には教会の讃美歌を教材として和声を教えていたという。同じく森川氏も大学に入学してから音楽を専門にしようと決心したという。音楽家教育、という専門教育に留まらず、一般の学生に教えることにより、彼らを教師として育て、広く音楽教育を広めようという太田の考えを見ることが出来る。

森川 最初はハイドンのソナタを弾くと「また始まった、チャンチャカチャンチャン、その右手と左手とどうにかならんか、わしのアンマをして丁度ええ」と言われたが、自分は教育専科の指導主事として、今はシニアの指導もしている。太田先生は仏教の事も随分学んでいられて、キリスト教と仏教の事もよく話して下さった。広島少年合唱隊のプログラムにも宗教曲を選んだ。「宗教音楽はヨーロッパしかないと思うやろ、日本にもあるんで。」と怒られる。「キリエ」や「声明」をステージでなさる。お寺に女声合唱の指導に行かれたり、浄土真宗の仏教歌を唄う会を開いたり、音楽高校のオーケストラで日本の宗教曲を歌ったり。他にも「むすんでひらいて」とルソーの関係は太田先生から話を聞いた。30年前は広島で教員養成のリトミックの講座が盛んになり、見ていると子どもの活き活きとした感じが指導者でぐんぐん変化してくる。

音楽が堪能な者ばかりではなかったという当時の広島師範学校において、愛情と情熱をもって学生を指導している太田の姿が浮かび上がってくる。その頃の日本の音楽教育については、学制によってその内容、方法が限定されていたことは前述したが、その中であって、西洋の宗教曲、邦楽、どちらの視点にも立つ教育を行った太田の視野の広さがうかがえる。

永柴 自転車の掃除をして、音楽室の掃除をして、誰も見ていないところで練習をしていたら、どこで見られていたのか、太田先生が流川教会に連れて行って下さった。リトミックは2、3、4拍子もわからない私のためにある、と思った。太田先生は口が悪いと言われてもフォローはして下さる。一度教えて頂いたら、離れることの出来ないようなものを持っていらっしゃる。離れていく人の話は聞いたことがない。

先の太田の寄稿文に出てきた「中古の自転車」を永柴は太田への尊敬の念を持って磨いている。太田は永柴を流川教会へ連れて行き、そこで永柴は聖歌隊としても活動することになり、合唱、声楽を学ぶきっかけとなる。これは当時の広島師範の師弟の絆を感じさせるエピソードでもある。また、音楽の専門家でない学生であっても、リトミックの教育法で音楽の理解を深められるよう、厳しくも熱心な指導がなされ、教え子達から慕われている太田の姿が浮かび上がる。

この様にして太田は、リトミックを教え子たちに実践しながら、その方法と効果を検討したのである。その傍ら、広島の学校教育でのリトミック教育の普及のために、小林を招いてリトミック講習会を開催するなどの活動を行った。太田は40代半ばまで広島大学に勤務し、その後エリザベト音楽大学の主任教授となり、定年後は比治山女子短期大学の主任教授となっ



た。比治山女子短期大学幼児教育科が開催した音楽会のプログラムにはリトミックが含まれている。当時の音楽会のリトミックのプログラムを紹介する。

- リトミック
- a. 身体反応
    - ◇基本リズム
    - ◇指導法
    - ◇特殊リズム（シンコペーション）
    - ◇複合リズム
    - ◇リズムフレーズ
    - ◇カノン（バッハ“インベンション”による）
  - b. ソルフエージュ
    - ◇聴音
    - ◇視唱
  - c. キーボードハーモニー（鍵盤上の和声）
  - d. 即興演奏

これだけの内容を含むリトミックのプログラムを、幼児教育を専攻する学生が発表する段階までに纏め上げるには、リトミック教育に精通していなければできないことであり、太田が自分自身で勉強を積んでいたことが判る。この演奏会開催を祝して、ニューヨーク・ダルクローズ音楽学校のシュースター博士から届けられたメッセージの訳文<sup>(40)</sup>が同短期大学の紀要に紹介された。

ダルクローズ音楽学校長 シャスター博士よりのメッセージ（訳文）

太田司朗教授

板野 平教授

比治山女子短期大学ならびに、1971年11月3日の発表会に参加される皆様へ  
ニューヨーク、ダルクローズ音楽学校、およびアメリカ・ダルクローズ教師研修センターからお祝い申し上げます。（中略）皆さんはエミール・ジャック・ダルクローズの教育の中に、豊かなインスピレーションと技術的に役立つものを発見されるでしょう。そして音楽を生活での重要で、意味あるものにするよう次の若い学生に贈ることができます。（中略）

板野教授、太田教授、他、日本の教師、音楽家と接するにおよんで、私は将来、日本は最も重要なダルクローズ・センターの一つになるであろうと確信しています。

1971年10月21日

署名 ヒルダ・M・シャスター博士  
学校長

シャスター博士が認めるように、我が国におけるリトミックの広がりには勢いがあり、1971年当時、既に日本ではリトミックが全国的に普及しつつあった。アメリカの音楽教育書には以下のように記されている。

1963年に国際音楽教育協会 (International Society for Music Education) の大会が東京で開催され、日本におけるダルクローズメソッドへの関心の高まりが報告された。日本では最大の音楽の教員養成大学でJ=ダルクローズのメソッドの教育が行われている。そして公立学校の教員やその他の教員に対するワークショップも全国的に行われている。また、時としてひとつのワークショップに200人以上の教員が参加することがある<sup>(41)</sup>。

このように驚きをもって紹介されるほどの日本におけるリトミックの広がりの基礎を築いたのは、太田の推薦で留学し、シャスター博士の下で学んだ板野であった。アメリカに渡った板野は、1952 (昭和27) 年にニューヨーク・ダルクローズ音楽学校に入学し、1956 (昭和31) 年までの5年間のリトミック留学を終えて帰国した。板野は帰国後、国立音楽大学の教員となり、後進、学生の指導にあたり、また全国各地での講習会などにより、広く日本にリトミックの普及に尽力した。板野は国立音楽大学でリトミックを専攻した教え子の学生、卒業生を次々にニューヨーク・ダルクローズ音楽学校へと送り出し、彼らは帰国後、全国でリトミック教育を実践したのである。太田が日本の音楽教育に必要と考えた身体を通した音楽教育、リトミックの教育法は、教育現場に求められ昭和30年代から広く普及していったのである。

## 7. おわりに

これまで日本に音楽教育として一番早く実践した人物は小林であると捉えられ、強調されてきたのは間違いではないが、太田も同時期に広島でリトミックを知り、自らの教え子らに実験的実践をしていたという事実が明らかになった。ここまでの調査、検討から、太田の教育観の側面は、5つ挙げられる。

### 1) 日本の音楽教育に対する視点

太田が当時の日本の音楽教育に必要なのは、唱歌教育、器楽教育のみではなく、身体の動きを活用する方法である、と考えた。大正・昭和前期は児童中心主義から土川五郎の遊戯が提唱されていた。音楽に身振りを伴う行進遊戯や律動遊戯等がそれである。大人の身振りをまねた動きの繰り返しや、月を表すには頭の上で手をかざす、といった方法は、教師の視点から「決められたことを教える」というものであった。当時の唱歌教育では子どもの視点からの「学ぶ教育」、または子どもの個性を「引き出す教育」という児童中心主義の教育の域に未だ達しておらず、太田が当時の音楽と動きの活動に何らかの不十分さを感じ取っていたと思われる。

先述した中山論文 (1992) 内の「視唱法とか聴唱法とかあるのは知ったよ。けど体で

受け止めるということは知らなんだ」という太田の言葉にあるように、当時の学制の下で行われていた音楽教育では、唱歌と器楽の教育はあったが、身体を活用した教育法は日本では全く新しいものであった。

太田は学校音楽教育にメソッド主義を取り入れようと模索していたが、西洋の教育法をやみくもに取り入れたのではない。自身の論文では園田清秀の音感教育、鈴木鎮一の才能教育にも言及しているように、国内、国外の音楽教育法について考察していた。教え子たちへの実践を通して、初めにリトミックの身体運動を取り入れ、そこからソルフェージュや和声感の育成にもJ=ダルクローズの方法を取り入れるという広がりを持っていった。

## 2) 国外の教育法に対する視点

太田は国外の教育法や教育哲学へも関心を持っていた。当時リトミックはスイスを初め、ドイツ、フランス、アメリカで高く評価されていた。太田は海外の教育哲学に関心を寄せている。太田は比治山女子短期大学の研究紀要『和顔愛護』に数多く寄稿しており、文中にはフレーベル、バスタロッチに言及したものもある。また、ヨーロッパへリトミック教育視察に赴いた際には、スイスに向かう飛行機の中で「ここにルソーの墓があるはずじゃ」と板野に話しかけ、ルソーへの見識も示した、というエピソードもある。

かつて二十数年前来朝した米国の一小学校教師である、ヘンリ・パークスト女史の、ドルトン・プランについての講演を聴いたことがある。会場には小学校教師は勿論、一流の教育学者も、知名の士も来聴していた<sup>(42)</sup>

この文は1953年に記されたものである。20年ほど前という1930（昭和5）年前後の事であり、太田が常に国内外の情報を敏感に捉え、見聞を重ねていたことが判る。

小林と同時期にリトミックを知り、いち早くリトミックの実践を始めていたことは驚きに値するものであるが、このことは太田が熱心な勉強家であり、最新の教育事情を察知し、より良い音楽教育を取り入れようとしていた証でもあろう。

## 3) 教え子に対する視点

太田は単に学生の音楽の演奏技術を伸ばすための指導をするのではなく、音楽教育者を育てることに心血を注いでいた。太田は「専門教育においては、よき演奏家を養成し、小・中学校の普通教育においては、音楽を通してよき人間を培わんとしているのである<sup>(43)</sup>」として、教え子らには子どもの人間性を培う教師であるよう希望している。つまり、太田自身の教え子に対する教育の目標が「人間性を培う」ことであつたといえよう。J=ダルクローズのリトミックは、知性、身体、意志、感受性の育成によって「人格的個性の発達」を促すものである。この理念に太田の教育観が呼応したと言える。太田は、子ども、学生、社会人に至るまで、すべての人々に通ずる音楽教育法として、リトミックを取り入れた。教え子らにリトミックの教育法を活用した教授をすることによって、音楽の基礎的能力の育成と、人間性の育成

を目指したのである。

#### 4) 地域、「広島」に対する視点

太田は地域に根差して幅広く活動していく音楽教育家であった。また、芸術教育の中樞を担う「上野」に対して、「広島」の自分たちも教育界を牽引していくという気概を持っていたであろう。校歌の作曲依頼の数にも見られるように、太田の教育活動は地域「広島」に深く根をはるものであった。

#### 5) 宗教者としての視点

太田はキリスト者であった。西洋の思想、西洋の文化を取り入れることは自然のことであつたらう。原爆投下まもなくの広島で音楽教育の仕事をした姿勢は、キリスト者としての奉仕と慈愛の精神から生まれたものであると考えられる。何より、「ヒロシマ」として語られる広島の地から、リトミックの留学生の派遣がなされたことは、流川教会と太田の繋がりがあつたからである。

現在の日本のリトミックの広がり的一端を担った太田の役割は大きい。結果的に太田は広島の地に活動の場を置きながら、音楽教育法のリトミックを通して、広島、日本の再生を成し遂げるための助力をしたと考えられる。

感性を養う音楽教育であるリトミックの普及に貢献した人物、太田司朗の関わりについて言及した。広島に原爆が投下されたことにより、戦後のリトミック教育が一時的に衰退はしたが、太田が戦前から広島の地で深く、広く、高く探究した教育活動やリトミック実践があつたからこそ、教育活動を再開することができたと言えよう。太田の広島師範、広島大学赴任時代の資料が極めて少なく、後年に勤務した比治山短期大学の研究紀要の資料が中心となつたため、教師生活前半の時代の資料収集が課題として残る。今後は太田に続き、天野、板野の移入史上の関わりと教育観を探っていくこととしたい。

#### 注及び参考文献

- 1) 幼稚園教育要領，文部科学省告示第26号（2008）
- 2) onkan-web.net「ONKAN」，2009年2月
- 3) E. Jaques-Dalcroze *Le rythme la musique et l'éducation* Edition Fæstisch (1558)
- 4) E. Jaques-Dalcroze 前掲書 (1558) p.85
- 5) E. J= ダルクローズ，山本昌男訳，『リズムと音楽と教育』pp.113-128
- 6) 福嶋省吾「日本におけるリトミック教育の歴史的概観」『リトミック研究の現在』開成出版（2003）pp.25-39
- 7) 板野晴子「小林宗作によるリトミック移入と新渡戸稲造による示唆」日本ダルクローズ

音楽教育学会誌 Vol.36（2011）

- 8) 板野晴子「ヒロシマからのリトミック留学生派遣の経緯に関する研究—谷本清の巡回講演日記から—」日本ダルクローズ音楽教育学会誌 Vol.35（2010）
- 9) 広島大学文書館『広島大学の歴史』広島大学文書館（2008）pp.2-3
- 10) 中山裕一郎「太田司朗先生とリトミック—日本におけるリトミック移入史の一断面—」日本ダルクローズ音楽教育研究 Vol.17（1992）
- 11) 「ひろしま人物誌 音楽編第14回」『けんみん文化』
- 12) 広島市広報課 [www.city.hiroshima.lg.jp](http://www.city.hiroshima.lg.jp)「広島市 市民生活」
- 13) 広島市広報課同上
- 14) 筆者は太田司朗の家人、太田直子氏への電話での聞き取り及び2010年2月広島市内での面会、私信の往復を行った。
- 15) 広島流川教会第60回音楽礼拝パンフレット
- 16) 太田司朗「ヨーロッパ・リトミックの旅」『和顔愛語』vol.5-1（1974）p.29
- 17) 太田司朗「幼稚園の保育とダルクローズのリトミック」『和顔愛護』比治山女子短期大学幼児教育研究会 vol.6-2（1976）p.31
- 18) 明治33年8月21日文部省より出された法令。「唱歌ハ平易ナル歌曲ヲ唱フコトヲ得シメ兼ネテ美感ヲ養ヒ徳性ノ涵養ニ資スルヲ以テ要旨トス……」として小学校における教科内容を事実上規制したもの。
- 19) 太田司朗（1976）p.33
- 20) 「第40回記念ダルクローズ・リトミック音楽教育法講習会案内」全日本リトミック音楽教育研究会（1994）
- 21) 永柴氏、森本氏への聞き取り調査は2010年12月広島市ホテルグランヴィアのティールームにて行った。
- 22) 柿本氏からの聞き取り調査は2011年1月比治山女子短期大学音楽室にて行った。
- 23) 中山裕一郎（1992）p.4
- 24) 中山裕一郎（1992）p.4
- 25) 永柴氏への聞き取り調査
- 26) 太田司朗（1976）pp.31-32
- 27) 平沢信康「初期文化学院における舞踊教育実践について」鹿屋体育大学学術研究紀要第34号（2006）p.12
- 28) 太田司朗（1976）p.34
- 29) 太田司朗（1976）p.34
- 30) 太田司朗（1976）p.31
- 31) 太田司朗（1976）p.31
- 32) 太田司朗（1976）p.31

- 33) 太田司朗 (1976) p.32
- 34) 東京音楽学校は文部省直属の音楽取調掛を擁し、音楽家、音楽教育家を養成する中心的教育機関であった。音楽界では「上野」と称することもある。
- 35) 太田司朗 (1976) p.31
- 36) 広島大学と筑波大学は第二次世界大戦前、官立の文理科大学として教育界への大きな影響力を持ち続けた。
- 37) 太田司朗 (1976) p.33
- 38) 太田は「けんみん文化」の表題に「高潔の士、太田司朗」として紹介されている。
- 39) 「昭和十四年広島県師範学校本科第一部入学生の記録」『道程』, 蒼空会編集委員編, (1984) pp.4-5
- 40) 「ダルクローズ音楽学校長 シヤスター博士よりのメッセージ」『和顔愛語』第1号, 比治山女子短期大学幼児教育研究会 (1972) p.58
- 41) Beth Landis, Polly Carder *The eclectic curriculum in American music education*. Virginia: Music Educators National Conference (1972) p.37
- 42) 太田司朗「小学校音楽教師に希む」『学校教育』所収, 学校教育研究会 (1953) p.14
- 43) 太田司朗 (1953) p.13